

## 平成 30 年度研究プロジェクト計画概要

研究種別	■共同研究 9	公益目的事業 17
主査名	鹿島 茂 中央大学理工学部教授	
研究テーマ	高齢化社会における家族構成の変化と交通手段の適切な関係	
<p>我が国の高齢化は、モータリゼーションの成熟化と交通手段の高速化の概成した時代に生じているといえるであろう。昨年度は高齢者の交通行動の特性、高齢者を対象とした交通対策についての現状の分析に加え、高齢社会で見られる複数の典型的なタイプの都市を例に適用可能な交通の姿を描くことを試みた。</p> <p>本年度は、昨年度の研究過程で指摘された、①交通手段の高速化が地域の利便性の相対的な関係を変化させたのではないか、この相対的な利便性の変化が高齢化に影響を与えたのではないか、②モータリゼーションの成熟期に生じた高齢化は、モータリゼーションの形（保有率や車種構成）に影響を与えたのではないか、この影響が高齢者の交通行動に影響しているのではないか、についてまず検討する。さらにこうした検討結果を基本的認識として昨年度描いた交通の姿を用いて、③高齢化社会での交通を考える上で分けて考えることが必要と考えられる属性から地域分類を行い、そのうえで④地域分類ごとに交通手段として必要な仕様を明らかにし、超小型モビリティをはじめとする現在提案されている様々な交通手段で適切に対応可能な地域の範囲を明らかにするとともに、今後検討が望まれる交通手段の条件を検討する。</p> <p>研究項目の①、②の具体的内容として現時点では以下のように考えている。</p> <p>① 高速道路と新幹線がともに整備されていない時代（1960 年を想定）からほぼ概成した現在までで、各地域から東京、大阪等の中心的な都市への利便性（所要時間）の変化から、利便性の地域間格差が広がったのか、相対的に不便になった地域が存在するのかを検討する</p> <p>② 人口規模、大都市圏との関係から基礎自治体を分類し、各分類ごとに基礎自治体を分析単位として人口当たりの保有率、世帯当たりの保有率、保有自動車に占める軽自動車の割合の 3 つの指標の変化を高齢化との関係を中心に見ていく</p>		